

# 幼児の「性自認時期」と「対人スタンス」との関係

—幼稚園 3 歳児クラスの観察から—

比較教育社会学コース 大 滝 世津子

Infants' Gender Identification and Social Relations: Observation of a Kindergarten Class

Setsuko OHTAKI

Focusing on two classes of as well as their teachers of three-year-old children as well as their teachers in a kindergarten, this research, which was held between April to October 2005, investigates how gender consciousness among children are related to their social relationships with teachers are peer groups. The research finds out that a majority of the children did not have any gender identity before entering the kindergarten, and there is no clear evidence to show that sex or date of birth are related to the time when children identify their gender. However, before entering the summer vacation at July, most of the children already have clear gender consciousness. The research then shows that children will recognize their gender identity earlier if they prefer playing within a group and communicating more with teachers. On the contrary, for those children who prefer to play alone or to keep a distance from teachers, they will identify their gender later. In addition, for those children who always stick to teacher but prefer to play alone, they still have earlier gender consciousness.

## 目 次

### I. 問題設定

- A. 目的
- B. 何をもって性自認とするのか

### II. 課題構成

### III. 対象と方法

- A. 対象
- B. 方法

### IV. 結果

- A. 各幼児が性自認したのはいつか(SQ1)
- B. 各幼児の性自認時期は性別・年齢・誕生日順・兄弟姉妹の有無と関係があるか(SQ2)
  - 1. 性別との関係
  - 2. 年齢との関係
  - 3. 誕生日順との関係
  - 4. 兄弟姉妹の有無との関係
- C. 各幼児の対人スタンスはいかなるものか(SQ3)
  - 1. 保育者との関係の持ち方
  - 2. 仲間との関係の持ち方
- D. SQ1と3の関係はどうなっているのか(SQ4)

### V. 結論(考察)

### I. 問題設定

#### A. 目的

本研究は幼稚園 3 歳児クラスにおける幼児と保育者および仲間とのスタンスのとり方と性自認時期の関係を明らかにすることを目的とする。

これまで教育社会学においては、幼児のジェンダーの社会化に関するいくつかの研究が蓄積されてきた。これらの研究においては、そもそも性自認がいかんして受け入れられ、個人の中で固定化していくのか、そのきっかけやプロセスについてはほとんど扱われてこなかった。

一方で、心理学の分野では性自認についての多くの研究および理論が蓄積されてきた。これに対し、大滝(2006a)は、これらの心理学的先行研究においては「性自認には社会の影響がある」という点について指摘されながらも、①家庭外、かつ②一対集団関係、における性自認メカニズム、③幼児の具体的な相互行為と性自認の関係、④幼児間の多様性、については必ずしも明らかにされてこなかった、また、⑤幼児の性自認がなされた社会的背景の変化については考慮に入れられ

てこなかったことを指摘し、以下のような理由からこれらの視点を導入して幼稚園における研究を行った。

すなわち、かつての幼児は幼稚園入園前に同性集団(同性のみで形成された集団)・異性集団(自分にとっての異性のみで形成された集団)・男女混合集団(男女混合で形成された集団)に接することにより性自認に至った側面があったと考えられるが、少子化により兄弟姉妹数が減少し、また地域の連帯力も低下している今日において幼児が初めて同性集団・異性集団・男女混合集団に出会うのは幼稚園である場合が多いと考えられる。そのため、現代の幼児の「性自認」に対して幼稚園が果たしている役割は大きいということである。

その結果、幼児の性自認は幼稚園における集団の影響をも受けてなされるものであることが推察され、幼児はクラス内集団の影響を受けたことで、年齢とは独立した独自の発達を遂げていることが明らかにされた。

この次の段階として大滝(2006b)では「幼稚園3歳児クラスにおいて各幼児が幼児同士の集団と接することにより、どのようなメカニズムで性自認したのか」ということが明らかにされた。

これらはクラス内においてどのようなスタンスで他者と接している幼児がいつ性自認するのか、という各幼児のもつ性質の側面については明らかにしていない。しかし、幼児期の性自認メカニズムについて詳細に解明しようとするならば、この点を明らかにすることが重要である。そのため本研究はこの点を明らかにすることを目的とする。

## B. 何をもって「性自認」とするのか

以上のように、本研究は大滝(2006a)の議論の次の段階を明らかにするものとして位置づける。そのため、用語の定義等は大滝(2006a)と同じものを使用する。したがって、以下に大滝(2006a)において使用されている定義を簡単にまとめる。詳細については大滝(2006a)を参照されたい。

本研究においては「性自認」という概念を使用する。これは英語では“gender identity”という概念であるが日本においてはいくつもの訳語があり曖昧なものである。

この曖昧さを極力排除して自覚的に論じていくために「性自認」を主体形成の一部と考え、J.バトラーの主体形成に関する議論を援用すると、幼児の「性自認」は「呼びかけ」(=「オンナノコ／オトコノコ」と呼びかけられたときに振り返ること)、「ふるまい」(「女らしい／男らしいふるまい」をすること)、「ことば」(「女らし

い／男らしいことばづかい」をしていること、性別に関する言葉を発すること)の3つの次元の反復によって形成される、と考えられる。

この中で、本研究においては「性自認」の中の「呼びかけ」の次元のみをとりあげ、その他の2つの側面については取り上げない。本研究が採用する、幼児が「性自認」した、とみなすクライテリア(=ものさし)は、「呼びかけ」、すなわち、ある幼児が「オンナノコ／オトコノコと呼びかけられた時に振り向いたこと」とする。

本研究においてはこのクライテリアを使用して後述するような実験を行うことにより、各幼児が「性自認」したか否かを測定する。その際、実験を行う際の便宜の関係上、前述の定義を少々変換し、先生が幼児に対して「『オンナノコ／オトコノコこっちに来て』と呼びかけたときに先生のところへ行ったこと」をもって「性自認した」と定義する。

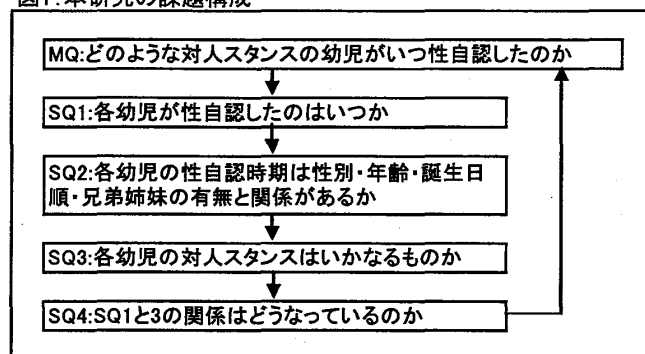
## II. 課題構成

以上より、本研究は以下の点を明らかにすることを課題とする。本研究は「どのような対人スタンスの幼児がいつ性自認したのか」という問いをメイン・クエスション(以下MQ)としている。しかしこの問いは抽象度の高い問いであるため、この問いを解くためにはいくつかの検証可能な問い(サブ・クエスション。以下SQ)にブレイクダウンする必要があると考える。そのため本研究を左の図のように設定する。以下では図1に沿ってMQとSQについて論じる。

本研究のMQを明らかにするためには、前述のものさしを使用して、「SQ1:各幼児が性自認したのはいつか」を検討する必要がある。これにより各幼児の性自認時期を示す。

その上で、擬似相関の可能性を確認するために予め「SQ2:各幼児の性自認時期は性別・年齢・誕生日順・

図1: 本研究の課題構成



兄弟姉妹の有無と関係があるか」を検証し、これによりこれらの要素は性自認時期と関係がないことを示す。その上で「SQ3：各幼児の対人スタンスはいかなるものか」を「対保育者」「対仲間」別に検証する。最後に「SQ4：SQ1と3の関係はどうなっているのか」を分析し、両者の関係を示す。これによってMQを明らかにする。

### Ⅲ. 対象と方法

#### A. 対象

本研究は神奈川県X市にある学校法人Q幼稚園の3歳児クラス2クラス(R組, K組)に属する全幼児(R組：女児7名・男児8名, K組：女児7名・男児9名)及び担任保育者を対象とした<sup>1)</sup>。Q幼稚園は①児童中心主義を採用している②特定の宗教の影響を受けていない、という点では日本における一般的な幼稚園と共通の要素を有している。一方で、「自由遊び中心の指導をしている」という点では、「一斉指導」を中心としている幼稚園が多い中で異なる存在である。

しかしながら本研究の目的からすれば、「幼児同士の関係」についても重点的に観察することが望ましい。その際、自由遊び場面が多いQ幼稚園は「幼児同士の関係」を見られる場面が多い、という点で対象として有効な幼稚園であると考えられる。以上のような理由から、本研究においては対象としてQ幼稚園を選定した。

なお、Q幼稚園における3歳児クラスは全部で4クラスある。いずれも先生は女性で、30代前半が3名、40代後半が1名である(R組：40代後半, K組：30代前半)。また教室は1階に2クラス、2階に2クラスある。クラスの人数は各クラス15～16名となっている。教室の広さは2階の2クラスが狭く、1階の2クラスが広い(R組：2階, K組1階)。

こうした状況の中で、R組とK組は先生の年齢、教室の階、教室の広さなどにおいて最も対極にあると考えられる2クラスである。そのため同じ年少組であっても違いがでるとすれば最も大きな差がでるのではないか、また、それでも共通の結果が出た場合にはより一般性に近づくのではないかと、という考えのもとこの2クラスを選定した。

#### B. 方法

幼稚園3歳児クラスにおいて以下のような実験および観察を行った。

#### <性自認した時期を測定するための「実験」>

本研究においては「幼児が性自認した日」を見るため、前述の「性自認のものさし」を用いて以下の実験を行った。

- ① 先生に依頼して、幼児全員を先生を中心とした半円状に集めてもらった。
- ② 先生に依頼して、「〇〇ちゃんどうぞ」と幼児の名前を1人ずつ呼んでもらい、先生のところへ行ったかどうかを記録した。
- ③ 先生に「オンナノコきてー／オトコノコきてー」と言ってもらい、誰が先生のところへ行ったかを記録した。
- ④ ①～③を毎月1～2回(4月から10月まで)行い、記録してその変化を見た。

#### <各幼児の対人スタンスを見るための観察>

本研究においては「各幼児の対人スタンス」を見るために以下のような観察を行った。まず観察時期は2005年4月～2005年10月であり、観察頻度は週2回、原則として月曜日にR組、火曜日にK組を観察した。

また、観察データの記録方法は以下の通りである。観察にあたっては、3歳児クラスの教室に手のひらサイズの小さなメモ帳とボールペンのみを持って入り、データを記録した。その際、観察の視点としては、3歳児クラスの幼児の生活全般を網羅的に観察したが、その中で特に幼児同士の相互行為場面については重点的に観察した。

なお観察の際、筆者は幼児にとっては「せんせい」という立場で観察に入った。これは幼児にとってクラスにいる大人は「せんせい」であるという認識が自然である、という幼稚園側の判断によって決定された。

最後に、観察の際の具体的な筆者の幼児との関わり方であるが、6月末までは、R組・K組ともに、幼児と接することが多かった。R組においては10月まで一貫して同じスタンスをとった。一方K組においては幼児の状態が不安定だったため、担任の先生との話し合いにより、途中(7月上旬)から、なるべく幼児と接しないスタンスに徹した。

### Ⅳ. 結果

#### A. 各幼児が性自認したのはいつか(SQ1)

では前述したものさしで測定すると、各幼児はいつ性自認していたのだろうか。

表1は、R組の各幼児が性自認した日を見るために作成した表である。列に各幼児が性自認した月・日、







1.1. 「幼児の保育者との関係のもち方」

「幼児の保育者との関係のもち方」が性自認時期とどのように関係しているのかについて検討するためには、まず各幼児が保育者とどのような関係のもち方をしていのかを明らかにする必要がある。そのために以下の作業を行った。

まず、7月の夏休み前までの観察データから、列が「各幼児名」、行が「各幼児が保育者と一緒に行動した回数」および「保育者と話した回数」からなる表を作成し、観察日ごとにカウントした。これにより、「保育者とのコミュニケーションがある」タイプと「保育者とのコミュニケーションがない」タイプに分類した。「保育者とのコミュニケーションがある」タイプは毎回保育者との行動や会話が複数回あった子である。一方「保育者とのコミュニケーションがない」タイプは保育者との行動や会話が毎回0～1回というのが続いていた子である。

次に、同じく7月の夏休み前までの観察データから、各幼児の保育者との行動および会話の内容を整理した。これにより、「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」の4タイプに分類した。

「保育者べったり傾向」の子は常に保育者と一緒に行動していないと不安になるタイプで、保育者が見えなくなるとたんに泣き出してしまうようなタイプの子であった。

「保育者に同調傾向」の子は、保育者がいなくても遊べるが、保育者が言ったことに同調的な反応をしていた子である。たとえば、保育者が「してはいけない」と言ったことをしている子に対してとがめる、仲間いやなことをされたときに保育者にいつけに行く、などの行動をとっていた子をこのタイプに分類した。

「保育者に反抗傾向」の子は、保育者との接点は多いものの、保育者が言ったことに反抗的な反応をしていた子である。たとえば、保育者が「してはいけない」といったことをあえてした子や、保育者に注意された際に保育者の言うとおりにしなかった子をこのタイプに分類した。

「保育者と没交渉傾向」の子は、保育者とほとんど接点を持たなかった子である。このタイプの子は保育者から話しかけられた場合には接点を持つこともあるが、自分から話しかけることはめったになかった。

なお、「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」の子は「保育者とのコミュニケーションがある」タイプであり、「保育者と没交渉傾向」

表9：R組とK組の「幼児の保育者との関係のもち方」

	保育者とのコミュニケーションがある			保育者とのコミュニケーションがない
	保育者べったり傾向	保育者に同調傾向	保育者に反抗傾向	保育者と没交渉傾向
R組	レン	サエ・ナツ・シン・リオ・アミ・レイ・トシ・ダイ	ジン・ミカ	サト・ヨウ・トモ・タク
K組	ユキ・ミチ・フミ・タツ・ユズ	ミト・ダン・ビン・ナオ・マリ	キラ・タカ・ケン・レオ	ハナ・リツ

の子は「保育者とのコミュニケーションがない」タイプであった。以上の作業を経て作成したのが、以下の表9である。

これは列にクラス名、行を「保育者とのコミュニケーションがある」と「保育者とのコミュニケーションがない」で分け、さらにそれを「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」に分けた。その上で各セルに該当する幼児名を記入したものである。

以上のように、R組・K組および3歳児クラス全体の「幼児の保育者との関係のもち方」を「保育者とのコミュニケーションがある」、「保育者とのコミュニケーションがない」および「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」に分類した。

1.2. 「幼児の保育者との関係のもち方」と性自認時期との関係

以上、「幼児の保育者との関係のもち方」について誰がどのような関係のもち方をしているのかについて見てきた。では「幼児の保育者との関係のもち方」と性自認時期はどのような関係にあるのだろうか。

表10は3歳児クラス全体の「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」「保育者に反抗傾向」「保育者と没交渉傾向」の4タイプと性自認時期との関係を見るために作成した表である。これを全体で見ると、最も早く4月に性自認した幼児は「保育者に同調傾向」のところに集中して分布しており、最も遅く6月7月に性自認した幼児は「保育者と没交渉傾向」のところに集中して分布していた。したがって、表10を以下のように変換してみる。

表10'は表10の「保育者べったり傾向」「保育者に同調傾向」の位置を入れ替えたものである。これを全体で見ると、多少の誤差はあるものの、おおむね「保育者に同調傾向」から「保育者と没交渉傾向」にかけて左上から右下に向けて斜めに分布していた。すなわち、保





表11:3歳児クラス全体の「幼児の保育者との関係の持ち方」と性自認時期

	保育者とのコミュニケーションがある																	保育者とのコミュニケーションがない													
	レン	サエ	ナツ	シン	ミト	ダン	キラ	リオ	アミ	レイ	ユキ	ミチ	ヌミ	マリ	ビン	ナオ	タカ	ケン	レオ	トシ	ジン	ダン	ミカ	タツ	ユズ	ハナ	サト	ヨウ	トモ	タク	リツ
4	●	●	●	●	●	●																									
5							●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●												
6																				●	●	●				●					
7																							●				●	●	●	●	
8	夏																	休					み								
9																															
10																								×	×						×

「保育者とのコミュニケーションがない」幼児ほど相対的に性自認時期が遅い傾向にあった。それをさらに詳細に見てみると、「保育者とのコミュニケーションがある」幼児の中では、「保育者に同調的」な幼児、「保育者べったり傾向」の幼児、「保育者に反抗傾向」の幼児、の順に性自認をしていったことが明らかになった。また、「保育者とのコミュニケーションがない」幼児である「保育者と没交渉傾向」の幼児は詳細に見ても、性自認したのが3歳児クラスの中で最も遅かった。

## 2. 仲間との関係の持ち方

では次に、「幼児の仲間との関係の持ち方」が性自認時期とどのように関係しているのかについて検討する。

### 2.1. 「幼児の仲間との関係の持ち方」

「幼児の仲間との関係の持ち方」が性自認時期とどのように関係しているのかについて検討するためには、まず各幼児が仲間とどのような関係の持ち方をしているのかを明らかにする必要がある。そのために以下の作業を行った。

まず、7月の夏休み前までの観察データから、観察日ごとに、列、行ともに幼児全員の名前を並べた表を作成した。次に観察データから、この日に誰が誰と何回一緒に遊んだかをカウントしたものを各セルに記入した。この表をもとに、遊んだ回数が多かった子同士を「よく一緒に遊んでいる子」として線でつないでいき、クラス全体の人間関係を図示した。これを観察日ごとに作成し、クラスの間関係の推移をみた。

その上で、継続的に「集団(幼児同士3人以上)で遊ぶ傾向」にある子、「個人で遊ぶ傾向」にある子、場面によってそのどちらにも属する「中間」の子、の3つのタイプに分類した。「集団(幼児同士3人以上)で遊ぶ傾向」にある子というのは、いつも誰かと一緒にいないと遊ぶことができないタイプの子であった。そのため1人で遊ぶということはほとんど見られなかった。

「個人で遊ぶ傾向」にある子というのは、自分の世界を持っており、1人でも遊ぶことができるタイプの子であった。このタイプの子は必要があれば2人で一緒に遊ぶこともあったが、1人で遊べる度合いは他のタイプの子に比べると最も高かった。「中間」の子は、自分の世界を持っており、1人で遊ぶこともできるが、自分の必要性や興味にあわせてフレキシブルに集団で遊んだり1人で遊んだりするタイプの子であった。

以上の作業を経て作成したのが、以下の図2である。図2について見てみると、「集団(幼児同士3人以上)で遊ぶ傾向の子」は10名、「個人で遊ぶ傾向の子」は11名、その両者に属する「中間の子」は10名、と3つのタイプともほぼ同数であった。

また、男女の分布について見てみると、「集団で遊ぶ傾向の子」と「中間の子」はともに「男：女 = 6名：4名」、「個人で遊ぶ傾向の子」は「男：女 = 5名：6名」であった。全体的に3つのタイプの間には大きな差はなかった。しかし詳細に見てみると、「個人で遊ぶ傾向の子」のみ女の子の数が男児の数よりも多かった。全体で見ると「男：女 = 17名：14名」で女の子の方が少ないことを考えると、女の子は「個人で遊ぶ傾向の子」が相対的



表13: 3歳児クラス全体の「仲間との関係の持ち方」「保育者との関係の持ち方」「性自認時期」の関係

	保育者とのコミュニケーションあり																保育者とのコミュニケーションなし														
	保育者に同調傾向								保育者にべったり傾向				保育者に反抗傾向				保育者と没交渉傾向														
	集団で遊ぶ傾向				個人で遊ぶ傾向				中間				個人で遊ぶ傾向																		
	サエ	ナツ	シン	ミト	ダン	リオ	アミ	レイ	マリ	ビン	ナオ	ダイ	トシ	レン	ミチ	ユキ	フミ	ユズ	タツ	キラ	タカ	ケン	レオ	ジン	ミカ	ハナ	タク	ヨウ	トモ	サト	リツ
4	●	●	●	●										●						●											
5					●	●	●	●	●	●	●	●			●	●	●			●	●	●	●								
6													●												●						
7																								●		●	●	●	●		
8	夏								休								み														
9																															
10																															×
集団	69%								0%				17%				0%														
中間	23%								17%				67%				33%														
個人	8%								83%				17%				67%														

表13について見てみると、「保育者に同調傾向」の子の69%が「集団で遊ぶ傾向の子」、23%が「中間の子」、8%が「個人で遊ぶ傾向の子」であった。大半が「集団で遊ぶ傾向の子」であった。また、「保育者べったり傾向」の子の83%が「個人で遊ぶ傾向の子」、17%が「中間の子」で、「集団で遊ぶ傾向の子」はいなかった。大半が「個人で遊ぶ傾向の子」であった。そして、「保育者に反抗傾向」の子の67%が「中間の子」で最も多く、「集団で遊ぶ傾向の子」および「個人で遊ぶ傾向の子」はともに17%であった。最後に、「保育者と没交渉傾向」の子の67%が「個人で遊ぶ傾向の子」、33%が「中間の子」であり、「集団で遊ぶ傾向の子」はいなかった。大半が「個人で遊ぶ傾向の子」であった。

以上より、「保育者に同調傾向」の子の大半が「集団で遊ぶ傾向の子」、「保育者べったり傾向」の子の大半が「個人で遊ぶ傾向の子」、「保育者に反抗傾向」の子の大半が「中間の子」、「保育者と没交渉傾向」の子の大半が「個人で遊ぶ傾向の子」であったことが明らかになった。

さらに詳細に見ていくと、「保育者に同調傾向」の子の中で最も遅く性自認したトシは「個人で遊ぶ傾向の子」であった。そして、「保育者に反抗傾向」の子の中で最も遅く性自認したミカも「個人で遊ぶ傾向の子」であった。このことから、保育者と「同調的」あるいは

「反抗的」な形でコミュニケーションをとっていても、幼児同士のコミュニケーションがない場合は各タイプに該当する幼児の中で性自認時期が最も遅かったことが明らかになった。

また、「集団で遊ぶ傾向の子」は全員が「保育者とのコミュニケーションがある」子であった。さらに、幼児同士の集団で遊び、保育者に同調的なタイプはクラスで最も性自認が早かった子が多かった。そして、幼児同士のコミュニケーションがなくとも保育者にべったりくっついていての子は性自認時期が比較的早かった。反対に幼児同士のコミュニケーションも保育者とのコミュニケーションもなかった子は性自認時期が3歳児クラス全体で最も遅かった。

以上より、「仲間との関係の持ち方」「保育者との関係の持ち方」「性自認時期」の3つの要因の間には、「集団で遊ぶ傾向」かつ「保育者とコミュニケーションがある」傾向（とくに「保育者に同調傾向」）をもつ幼児は3歳児クラス全体において性自認時期が相対的に早く、「個人で遊ぶ傾向」かつ「保育者とコミュニケーションがない」傾向（とくに「保育者と没交渉傾向」）をもつ幼児は性自認時期が相対的に遅い傾向があったことが明らかになった。また、幼児同士の関係においては「個人で遊ぶ傾向」を持っていても「保育者べったり傾向」にある幼児は相対的に性自認時期が早い傾向があった。

## V. 結論(考察)

### A. 「集団で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションがある子」は性自認時期が相対的に早かった理由

これについて考察するにあたり、まず「集団で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションがある子」は性自認時期が相対的に早かったのはなぜか、について考察する。では「集団で遊ぶことを好む」「保育者とコミュニケーションがある」という要因に共通するのはどのような点だろうか。

まず第1に、幼稚園3歳児クラスで生活していく中で他者とのコミュニケーションを必要としている、という点が挙げられる。そして第2に、「保育者」「クラスで中心的な幼児」といった「権力を持つ人」に対して敏感である、という点が挙げられる。なおここで「権力を持つ人」という表現は以下のような意味合いで使用している。

すなわち、「保育者」「クラスで中心的な幼児」は「クラスにおける物事を進める際の絶対的な権限を握っている」という点、また、同時に「『男女間の非対称性』を他の幼児に対して提示する存在である」という点を満たしている存在である、という意味である。ここでは、この意味において「権力を持つ人」に限定して論じる。

以上2点より、このタイプの幼児は幼稚園3歳児クラスで生活していくにあたって「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる性質を持っている、と考えられる。

では「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる性質を持っている幼児はなぜ性自認した日、すなわち「保育者に『オンナノコ/オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早かったのだろうか。これを考えるにあたり、まず「保育者に『オンナノコ/オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」というのが幼児にとってどのような意味を持っているのかについて検討する。

多くの場合、これは少なくとも①「オンナノコ/オトコノコ」という言葉をいわれた時に自分が動く存在であるということ認識している状態であると考えられる。また、②自分以外の目印となる他者が動いた時に一緒に動いただけ、という可能性も考えられる。

ではこの2つの場合に、「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる性質を持っている幼児が「保育者

に『オンナノコ/オトコノコ/オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早かった、という現象はどのように説明できるだろうか。

まず幼児にとって「権力を持つ他者」としては「保育者」と「クラスで中心的な幼児」が考えられる。この二者はともに、幼児たちと関係をもつ際に「オンナノコ/オトコノコ」という言葉を使用することが多いことが観察によって確認されている。具体的には「保育者」は、幼児を統制する場面で「オンナノコ/オトコノコ」の2グループに分けて動かす目的で「オンナノコ/オトコノコ」という言葉を使用することが多い。

また、「クラスで中心的な幼児」は「同性の幼児との結束を固める」および「異性を排斥する」という目的で主に遊び場面において「オンナノコ/オトコノコ」という言葉を使用し、自らのクラスにおける地位を固めているという場面がみられる。

以上より、「権力者」は「オンナノコ/オトコノコ」という言葉を媒介として幼児と関係を持つ、という方法をとっている、ということができる。

こうした状況の中で、「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる性質を持っている幼児が「権力者」に従うためには、「オンナノコ/オトコノコ」という言葉のおかれた状況を的確に把握し、的確に動く必要がある。すなわち、幼稚園の中で自分が生きていくためには保育者に「オンナノコ/オトコノコ」という言葉で呼ばれた時に動けるようになる(=いち早く性自認をしておく)必要性が高い。そのためこのタイプの幼児は「保育者に『オンナノコ/オトコノコどうぞ』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早かったのではないかと考えられる。

前述のように、「保育者に『オンナノコ/オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った」という現象は①「オンナノコ/オトコノコ」という言葉をいわれた時に自分が動く存在であるということ認識している状態、②自分以外の目印となる他者が動いた時に一緒に動いただけ、という2つの状態が考えられる。しかしいずれの状態であっても、「他者の指示に的確に従えるようになりたい」という幼児本人の意思が働いていることが推察される。①と②の違いは、「オンナノコ/オトコノコ」という言葉を目印として認識することで動けるようになるか、他者を目印として動けるようになるか、の違いである。つまり幼児本人にとっては「権力者」の指示に的確に従うための手段の違いにすぎない。

いずれにせよ、以上のような理由から「権力を持つ他者に従う必要性が高い」と感じる必要性を感じる性質を持っている幼児にとっては「オンナノコ／オトコノコという言葉で動けるようになる必要性」が高い、と考えられる。

以上、「集団で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションがある子」は性自認時期が相対的に早かったのはなぜか、について考察した。

#### B. 「個人で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションが無い子」は性自認時期が相対的に遅かった理由

これをふまえ、以下では「個人で遊ぶ傾向の子」かつ「保育者とコミュニケーションが無い子」は性自認時期が相対的に遅かったのはなぜか、について考察する。

では「個人で遊ぶ」「保育者とコミュニケーションが無い」という要因に共通するのはどのような点だろうか。

まず第1に、幼稚園3歳児クラスで生活していく中で他者とのコミュニケーションを必要としていない、という点が挙げられる。観察によって、このタイプの幼児は1人で遊ぶことができる子である、ということが確認されている。そのため第2に、前述のタイプとは異なり、「保育者」「クラスで中心的な幼児」といった「権力」を持つ他者に対して鈍感である、という点が挙げられる。以上2点より、このタイプの幼児は、幼稚園3歳児クラスで生活していくにあたって「権力を持つ他者に従う必要が低い」と感じる性質を持っていると考えられる。

では「権力を持つ他者に従う必要が低い」と感じる性質を持っている幼児はなぜ「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に遅かったのだろうか。ここでは前述のタイプについての考察に対応させる形で考察する。すなわち、「権力を持つ他者に従う必要が低い」と感じる性質を持っている幼児は、「権力者」が使用する「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を認識しなくても、幼稚園の中で生きていけるスキルを持っている。それぞれが「自分1人の世界」を持っており、その中で1人で遊ぶことができる。すなわち、「オンナノコ／オトコノコ」という言葉で呼ばれた時に動けるようになる必要性が低い。そのためこのタイプの幼児は「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に遅かったのではないかと考えられる。

以上より、「集団で遊ぶことを好む」「保育者とコミュニケーションがある」という要因を持った幼児は、幼稚園で生きていくために「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を認識する必要性が高かったために「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早く、「個人で遊ぶ」「保育者とコミュニケーションが無い」という要因を持った幼児は幼稚園で生きていくために「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を認識する必要性が低かったために「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に遅かったのである、と考察した。

言い換えると、幼児が「保育者に『オンナノコ／オトコノコきてー』と呼ばれた時に、初めて保育者のところへ行った日」が相対的に早い遅いには、発達や男女差よりも幼稚園集団で生きていく上での幼児の「他者との関係のもち方に関する意思」と「オンナノコ／オトコノコ」という言葉を認識する必要性の高低」という2つの要因が関係している、ということが推察された。

これにより、幼児が保育者に「オンナノコ／オトコノコきてー」と呼ばれた時に保育者のところへ行く、という行動をするようになるまでには集団の影響が働いている、ということが示唆された。

#### C. 「オンナノコ／オトコノコ」という言葉と「権力」の関係

また、「オンナノコ／オトコノコ」という言葉は何の意味も持たずにまっさらなものとして幼児に提示され取り込まれるのではなく、提示された時点からすでに「保育者」「クラスで中心的な幼児」といった「権力者」との関係をもったものとして提示され、「権力者」の「権力」とセットのものとして「オンナノコ／オトコノコ」という言葉が認識され、とりこまれているのではないかと、ということが推察された。

このことから、本研究において提示してきたデータだけでは論証できないが、相互行為場面を詳細に分析すれば、「オンナノコ／オトコノコ」という言葉は初めから常に「保育者による統制」や「男が上、女が下、という社会構造と連動した価値観」などとセットで幼児の前に提示されている、という結果が出る可能性が推測される。この点については稿を改めて分析を進めていきたい。

(指導教員 恒吉僚子助教授)

## 注

- 1)本研究の中で使用するデータにおける固有名詞は、場所、個人の特定を避けるため全て仮名にしてある。なお、幼児を対象に集団による教育が行われるもうひとつの機関として保育所がある。本研究が保育所ではなく幼稚園を対象として選択したのは以下の理由による。すなわち、保育所は入所時期や1日のうちで保育所にいる時間が個々の幼児によって異なる。一方幼稚園は原則として入園時期が揃っており、一日のうちに幼稚園にいる時間も全員揃っている。そのため、集団における社会的経験の影響の差が見やすい。以上の理由により、本研究は幼稚園を対象として選択した。
- 2)ただし、本研究はひとつの幼稚園の2クラスだけを調べたものであり、より多くのサンプルの検討の結果、異なる結果が出る可能性もある。そのため、少なくともQ幼稚園のR組・K組においては性自認時期には明らかな男女差は見られなかった、と述べるに留めておく。

## 引用・参考文献

- 青野篤子ほか著『ジェンダーの心理学』ミネルヴァ書房, 2004
- 藤田由美子 2004 「幼児期における『ジェンダー形成』再考—相互作用場面における権力関係の分析より—」『教育社会学研究』第74集 329-348
- Judith Butler *EXCITABLE SPEECH*, Routledge, Inc, 1997 (=2004, 竹村和子訳『触発する言葉』岩波書店)
- 河出三枝子 1991 「ジェンダー・フェイズからの幼児教育試論—基本的考察と問題設定—」, 『岡崎女子短期大学研究紀要』第25号 1-12
- 河出三枝子 1992 「ジェンダー・フェイズからの幼児教育試論—保育現場におけるジェンダー・プラクティス—」, 『岡崎女子短期大学研究紀要』第26号 11-35
- 木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房, 2003
- 森繁男 1985 「学校における性役割研究と解釈的アプローチ」『京都大学教育学部紀要』31号 218-228
- 森繁男 1995 「幼児教育とジェンダー構成」竹内洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社
- 日本保育学会『日本の幼児の精神発達』, 1970
- 大滝世津子 2006a 「集団における幼児の性自認メカニズムに関する実証的研究—幼稚園における集団経験と幼児の性自認時期との関係—」『教育社会学研究』第79集
- 大滝世津子 2006b 「幼児同士の集団と幼児の性自認メカニズムの関係」, 大阪教育大学, 日本教育社会学会第58回大会報告原稿
- 斉藤耕二・菊池章夫編著『社会化の心理学ハンドブック』川島書店, 1990
- 相良順子 2000 「幼児・児童期のジェンダーの発達」伊藤裕子編『ジェンダーの発達心理学』ミネルヴァ書房, 14-31
- 高橋恵子・柏木恵子編『発達心理学とフェミニズム』, ミネルヴァ書房, 1995, pp.6-7

土肥伊都子 1996 「ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成」  
『日本教育心理学研究』第44巻第2号 187-194

## 付記

調査にご協力いただいたQ幼稚園の園長先生をはじめとした諸先生方、保護者の皆様、園児の皆様にご心より感謝いたします。